

2026年度 国際日本・中国学科総合型（小論文型）

出題の意図・解答例

1 出題の意図

(1) 漢詩・漢文

課題文は、現代の俳人が中国古典詩を取り上げ、その感性に共振しつつ、現代的感覚で新たに読み返そうとするものであり、ここでは陸游「書適」を題材として、子どもに還るような老人の無邪気さを愛おしむことが述べられている。問1は、課題文の内容を適切に理解しているか（読解力）を評価する。問2は、課題文を契機として、解答者自身の読書経験を論述させることで、解答者自身の経験、およびそれをどのように咀嚼して組み立て、論述できるか（発想力／構成力／表現力）を問う。これらにより、大学における学修のための基礎的な技能・能力を判定する。

(2) 論語

『論語』からは学問・教育・仕事・家族・政治など人生や社会に関わる様々なテーマについてのヒントを得られるが、今回は受験生にとっても身近なテーマであろう友人関係について孔子が述べている章句から出題した。解説も含めた本文から読み取ったこと、考えたことをまとめてもらい、読解力や論理的思考力、表現力を問う出題である。孔子や『論語』、ひいては儒学／儒教、また漢文訓読についての知識を求めるものではないが、本文中に『論語』の原文とその書き下し文が引用されているのは、中国古典や漢文訓読に対して親しみを持っている受験生の出願を期待しているものである。

問一は、主に読解力を問う設問である。口語訳の中の言葉を用いてももらうことで、孔子の考えの要点が浮かび上がり、文章をまとめやすくなるのではないかと考えた。問二は、問一を承けて今日における友人関係について自分の考えを述べてもらい、思考力・表現力を問う設問である。本文の内容に沿ってまとめても、自身の経験を中心に置いてまとめてもよい。

(3) 三国志

三国志には史実においても物語においても、人物の行為の是非について古来議論の絶えないものがいくつもあるが、出題した「泣いて馬謖を斬る」場面もその一つである。味方を敗戦に導く大きな失態を犯した馬謖は、孔明がその才能を評価して起用した人物であった。その人物を死刑に処することは、人材不足の蜀軍にとっては大きな損失となる。Bに見える蔣琬の考えもそのことを反映しているものである。しかし、孔明は信賞必罰の姿勢を組織に明らかに示すことを優先した。また、それはあくまでも行為の責任を問うものであって、個人を否定したものではない。それが分かっている馬謖も孔明への信頼を示す。それらのことを読み取って小論文にまとめてもらい、読解力や論理的思考力、表現力を問う出題である。

問一は、上記のうち、行為の責任のみを問う孔明の態度を読み取ってもらう設問である。問二は、孔明のような立場に自分が立たされたらどのような判断をするかを、Bの蔣琬と孔明の意見を参考にして考えてもらう設問である。架空の場面を設定して解答してもよいし、自分の経験に基づいて解答してもよい。また、どちらの設問も、三国志に関する知識があれば、それを用いて解答してもよい。

2 解答例

(1) 漢詩・漢文

問一

陸游「書適」に描かれている老人は、もう七十歳にもなろうというのに、まるで子どものような行動をさまざまに繰り返している。そして何度も読み返されたぼろぼろの本を、初めて学ぶときのように読み返す。この行為について作者は「まっさらだったころの感覚をくりかえし味わうあそび」であると理解する。老人になつてなお、子どものように無邪気に世界と出会い直すというのである。私たちは人生において経験を重ね、いつしか経験していいことについても、これまでの経験から類推してしまい、新鮮な感動を味わうことが難しくなっているように思われる。それゆえ、この老人のもつ子どものような無邪気さについては、率直にうらやましく感じられた

問二

中学生のときに初めて読んだサリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』は、その後も繰り返し読み、私の人格の一部を形成しているように思われる。最初は主人公ホールデンが世界に悪態をつくところに魅了されたが、今ではそれは思春期特有の自意識や、自分と世界との距離感をつかみそこねているがゆえの発言だったことに気付かされた。最近ではむしろ、ホールデンが失わずにいる妹への惜しみない愛情や、冬になるとセントラル・パークのあひるはどこへいくのか、という問いに重ねられた将来への不安について、思いをいたすことの方が多い。私の成長に応じて、そのたびに新しく感銘を受け、繰り返し読むことになる作品こそが名作なのだと思う。

(2) 論語

問一

孔子は友人関係について、「忠告して善に向かうように導」くようなものでなければならぬと言っている。しかし、今日のインターネット社会では、口当たりのいいコミュニケーションを交わしたり、あるいは逆に攻撃的な言葉を向けたりするばかりで、真剣に友人に対して忠告したり、善に向かうように導いたりすることがしにくくなっている。もし忠告によってお互いを善い方向に導く人間関係を築くことが難しい社会になってしまったのであれば、孔子のいう友人関係の基準を満たすことはできない。それゆえ「今日のインターネット社会では、極端に言うならば友達なんて要らないのかもしれない」という結論が導かれるのである。

問二

私はインターネット社会であっても友人は必要だと思う。孔子は忠告して善に向かえるような相手でなければ友達つきあいをしない方がいいと説くが、私は孔子が友人に求めるものが厳しすぎると思う。確かに、親しい中にあっても甘え合いに流されず、時には厳しく忠告できる関係であれば本当の友人といえるだろう。しかし、友人全てとそのような緊張をもって接したら疲れてしまう。孔子の時代と違い、今はインターネットを通じて多くの人と知り合いになる機会が多い。だから、いろいろな距離感の友人がいていいと思う。現代社会はストレスも多い。発散のための誹謗中傷はよくないが、口当たりのいいコミュニケーションで癒されたい時もあるのだ。

(3) 三国志

問一

馬謖を死刑にするにもかかわらず、孔明がかけた「お前の遺族は死後も孔明が面倒を見る」というやさしい言葉には、孔明が馬謖という個人を憎んだり、嫌ったりして死刑を言い渡したのではなく、あくまで馬謖の犯した行為に対する責任のみを追究するのだという態度が表れていると思う。遺族は今回の馬謖の失態とは無関係であり、馬謖がいなくなることで生活に不便をきたすであろうから、孔明は自分が面倒を見ると言ったのではないだろうか。まさに、罪を憎んで人を憎まずという言葉がぴったり当てはまると思う。馬謖の「死すともお恨みはいたしません」という言葉は、孔明がそのような態度の持ち主であることを承知してのものでもあろう。

問二

私は高校で野球部に所属していたので、野球を例に考えたいと思う。もしチームの戦力として欠かせない選手が大きな失態を演じた場合、私が監督だったらどう対処するだろうか。その選手を謹慎処分にして試合に出さないようにすれば、蔣琬の言うように、相手チームが有利になり、試合に負けて大会が終わってしまうかもしれない。そうなれば、他の選手は悔しくてやりきれないと思う。孔明の言うように、厳罰に処することで勝利につながることもあるかもしれないが、能力の高い選手を罰することで他の選手が浮かばれないはめにおちいることは避けたい。厳罰に処するのではなく、次の試合での活躍で失態をつぐなわせるのがいいと思う。